次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

(注)進士の志定茂といふ者ありけり。承元二年十月[a]二十八日、文殿の作文に参りたりけるに、夏の袍を きたりけるを見て、上下笑ふこと限りなし。定茂、われをわらふとは知り気もなくて、その日はやみに けり。後に、ある上達部[b]のもとへ参じて申しけるは、「一日、文殿の作文に、夏の袍をきて参りて侍り[x]しを人々見候ひて、余りに学問をして四季を（　Ⅰ　）知らぬやさしさ[c]といふ沙汰にこそ宣りて（　Ⅱ　）」と自讃しければ、聞くもの嘲哢[1]する事限りなかりけり。

この定茂、あたらしく車をしたてたりけるを、いかにも人に貸す事などもなくて秘蔵して持ちたりける に乗りて、(注)通方の大納言のいまだ殿上人にておはしける時、かの亭へ参り[y]たりけるほどに、俄かに[d]雨降り ければ、いそぎたちて、この車を門の中へ引き入れて、車宿りなる亭主の車をば引き出して雨にぬらして、 おのれが車を車宿りに立ててけり。(注)所司見つけて、「いかにかかる事をばするぞ[2]」ととがめければ、「君は[3]いく度も調じかへ給はん事、やすかりぬべし。」定茂が一車をぬらしては、また調じがたければ、かくし たるぞかし」といひければ、所司、力およばでやみにけり。

（『古今著聞集』による）

（注）進士の志…進士は式部省の登用試験に合格した人の称。志は検非違使庁の四等官。
通方…土御門内大臣源通親の子。
所司…貴族の家の雑務にあたる者。

問一　二重傍線部a「十月」、b「上達部」の読みを現代仮名遣いで答えなさい。（aは月の異名で答えること。）

問二　二重傍線部c「やさしさ」、d「俄かに」の単語の意味として最も適当なものを、次から選んで記号で答えなさい。

c「やさしさ」
ア　奥ゆかしさ
イ　不快さ
ウ　感心さ
エ　頼りなさ

d「俄かに」
ア　さめざめと
イ　少し
ウ　だんだん
エ　急に

問三　波線部「人々」について、同様の意味となっている単語を、本文中から抜き出しなさい。

問四　空欄（　Ⅰ　）に入る語として最も適当な語を、後から選んで記号で答えなさい。

ア　のみ　　イ　して　　ウ　だに　　エ　まで

問五　空欄（　Ⅱ　）に「候ふ」を適当な形に活用させて入れなさい。

問六　二重傍線部x「侍り」・y「参り」の敬語の説明として適当なものを、後から選んで記号で答えなさい。

ア　尊敬語で、筆者から通方の大納言への敬意
イ　尊敬語で、定茂から上達部に対する敬意
ウ　謙譲語で、筆者から通方の大納言への敬意
エ　謙譲語で、定茂から上達部に対する敬意
オ　丁寧語で、筆者から通方の大納言への敬意
カ　丁寧語で、定茂から上達部に対する敬意

問七　傍線部1「聞くもの嘲哢する事限りなかりけり」とあるが、なぜ「嘲哢」したのか。関係する人物を明確にして、分かりやすく説明しなさい。

問八　傍線部2とはどういうことか。「かかる事」の内容を明らかにして分かりやすく説明しなさい。

問九　傍線部3「君はいく度も調じかへ給はん事やすかりぬべし」を口語訳しなさい。

問十　本文の二つのエピソードから伺える定茂の人物像について最も適当なものを、後から選んで記号で答えなさい。

ア　自分が他人に笑われたことを決して認めたがらない、自我意識の強い頑固な人物。
イ　自分に向けられた都合の悪い発言も、冗談ではぐらかそうとする、ずるい人物。
ウ　自分に都合の良い解釈をして周囲からひんしゅくを買うが、どこか憎めない人物。
エ　常に身分の低い人々や立場の弱い人物に対して気配りを怠らない、心優しい人物。
オ　常に自らの目標達成のために地道な努力を続けることが出来る、我慢強い人物。

問一	a　　b					問二	c　　d		
問三		問四		問五		問六	x　　y		
問七									
問八									
問九									
問十									

古文　解答　（４０点分）

問一	a かんなづき　b かんだちべ（め）　①×２	問二	c ウ　d エ　②×２				
問三	上下　②	問四	ウ　②	問五	候へ　②	問六	x カ　y ウ　②×２
問七	定茂が人々に①、『季節はずれの服装を笑われていたのにもかかわらず②、』自分は季節の変化も気づかない程学問に熱中している人物と評判になっていると誤解し②、』しかもそれを貴人である上達部の前で自慢したことにあきれたから③。』 ⑧						
問八	雨が急に降ってきた時に①、『その家の主人である①』通方の大納言の車を車宿りから引き出して①、『自分の車を車宿りに停めたこと①。』 ④						
問九	（この家の主人の）通方君は①、『何度でも新調しなおされるようなことは③、』きっと簡単な事でしょう③。』 ⑦						
問十	ウ　⑤						

解説

問一　解答例の通り。
問二　解答例の通り。
問三　「上下」が「身分の高い人と低い人」をあらわす単語であることを理解していれば、容易に解答できる。
問四　程度の軽いものを示して、より程度の重いものを類推させる「四季の変化を**さえ**知らない」という口語訳になる単語「だに」を選択する。
問五　「こそ」があるので、係り結びの法則によって結びは已然形となる。
問六　解答例の通り。
問七　以下二点を採点の対象とする。①定茂の誤解のあらまし　②誤解したまま自慢する定茂に対するあきれた感情
問八　解答例の通り。
問九　以下三点を採点の対象とする。①主語　②「調じ」の意味、尊敬「給ふ」、婉曲「む」　③強意（確述）の用法
問十　「ぬべし」解答例の通り。

本文口語訳

文章生の四等官で定茂という宮中警護の武士がいた。承元二年十月二十八日に、紫宸殿の西にある校書殿で行われた漢詩文を作り合う集まりに参上した時に、（冬十月の季節であるのに）夏に着用する表着を着ていたのを見て、身分の高い人も低い人も定茂を笑うことはこの上もない。定茂は自分のことを皆が笑うとは気づいた様子もなくて、その日は終わったのであった。後になって、ある公卿の所に参上して定茂が申し上げたことは、「先日、校書殿での漢詩文を作る集まりに、私が夏に着用する表着を着て参上していましたのを人々が見まして、私があまりにも学問に熱中していて四季の変化をさえ知らない殊勝さよという評判として人々がおっしゃっておりました。」と自慢して言ったので、その話を聞く者が定茂をあざけり馬鹿にすることはこの上もなかった。

この定茂は、新しく牛車を飾り立てていたが、決して他人に貸すことなどもなくて大切にして所有していたが、その車に乗って、通方大納言が当時まだ四位、五位の身分でいらっしゃった時、その邸に定茂が参上したが、そのうちに急に雨が降ってきたので、定茂は急いで立って、この車を門の中に引き入れて、車宿りにある主人通方の車を引き出して雨に濡らし雨ざらしにして、自分の車を車宿りに停めたのであった。この家の庶務係の者がそれを見つけて、「どうしてこのようなことをするのか。」と定茂を責めたところ、「この家の主人通方君は何度でも新調しなおされることはたやすいことでしょう。定茂のたった一つしかない牛車を濡らしては、また新調しなおすことが難しいので、このようにしたのですよ。」と言ったので、この家の庶務係は反論も出来ずにそのままになってしまった。